# 名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2025 年　3 月　18 日

学部・学科名　　世界教養学科

担当教員氏名　　ヴァミューレン服部美香

| | |
|---|---|
| 1．区分 | 中期留学　・　語学研修　・　海外実習 |
| 2．プログラム名称 | 世界教養学科 中期留学 |
| 3．渡航先国名 | オーストラリア |
| 4．派遣期間 | 2024 年 8 月 23 日（金）　～　2024 年 11 月 18 日（月）<br>88 日間 |
| 5．派遣先教育機関名 | グリフィス大学 |
| 6．参加学生数 | 11 名 |
| 7．派遣目的 | 語学研修に加え、インターンシップ準備講座、ホームステイプログラムなどで英語運用能力を高める。インターンシップで仕事として専門性の高い会話力を鍛えるとともに多文化・多民族社会の中でどのように生きていくのかという将来のビジョンや自分のコンフォートゾーンが広がることを目指す。 |
| 8．派遣内容 | 世界教養中期留学プログラムは、9 週間の語学研修と約 2 週間のインターンシップを含む 3 ヶ月間の留学プログラムである。渡航前には「オーストラリア学習会」を実施する。この学習会では、オーストラリアの概要、歴史、多民族社会の形成過程、教育制度、文化について本や論文を用いながら学ぶ。学生は興味のある分野を調査し、意見や情報を交換することで、渡航先への理解を深めることを目的としている。<br>オーストラリア到着後は、ブリスベンのグリフィス大学（GELI）で習熟度別の英語クラスを受講する。ここで英語を集中的に学び、多国籍のクラスメートと交流することで、各国の文化や習慣についても学ぶ。その後、1 週間の |

| | |
|---|---|
| | インターンシップ準備コースを受講する。このコースでは、オーストラリアで働く際の注意点や企業研究を行い、インターンシップに備える。<br>現地企業での約 2 週間のインターンシップでは、専門性の高い英会話スキルを磨くことができる。ストレスの多い環境での作業を経験する中で、職場内でのコミュニケーションの取り方や、職員の職業観・ライフスタイルについて学ぶ機会を得る。これにより、卒業後の社会生活を見据え、職業観や人生観を見直すきっかけとなる。<br>多文化・多民族化が進むブリスベンでは、多文化共生を体験する機会が多い。異なる文化背景を持つホストファミリーとの生活は、生の英語に触れる貴重な場であると同時に、異文化理解を深める契機となる。また、多文化・多民族社会での生き方を考えるきっかけとなり、コンフォートゾーンを広げる研修である。 |
| ９．成果 | ブリスベンのグリフィス大学（GELI）では、習熟度別の英語クラスで集中的に英語を学んだ。授業内容としては、文章を読んでディスカッションを行うものから、文法、語彙力の強化、ライティングなど多岐にわたり、非常に充実したものであった。また、クラスメートは多国籍であり、韓国、中国、ベトナム、タイ、マレーシア、モンゴル、ペルーなどさまざまな国からの留学生と交流することができた。彼らの文化や習慣に加え、学ぶ姿勢や人生観からも多くの刺激を受ける学びの場であった。<br>現地での約 2 週間のインターンシップでは、負荷の高い環境で対応せざるを得ず、真の意味でのコミュニケーション力を鍛えることが出来た。また、職場内での効果的なコミュニケーション方法や、職員たちの職業観・ライフスタイルについても学ぶ機会を得た。この経験を通じて、卒業後の社会生活に向けて職業観や人生観を見直す大きな契機となった。インターンシップ派遣先からは勤勉さ、コミュニケーション力において高い評価を得た。また、インターンシップ終了後にそれぞれの経験について英語で発表をする機会を持つことで、それぞれの経験をより客観的に見つめる機会となった。現地スタッフにとっても、次回の研修に生かすための重要なフィードバックとなっている。 |

| | |
|---|---|
| | ブリスベンは多文化・多民族化が進む都市であり、多文化共生を体験する機会が非常に多い。異なる文化背景を持つホストファミリーとの生活では、生の英語に触れるだけでなく、異文化理解を深める重要な場となった。この経験により、多文化・多民族社会でどのように生きていくかという将来のビジョンが形作られるとともに、自分のコンフォートゾーンを大きく広げることができた。この研修は、当初の目標を遥かに超えた満足度の高いものとなった。 |
| １０．備考 | |

以上

中期留学帰国報告書

私は中期留学を通して、日本とオーストラリアの様々な文化や習慣の違いを体感した。今回は二つの大きな違いについて取り上げる。

一つ目は人柄だ。オーストラリアはマルチカルチャリズムの国であるため、人と比べる習慣があまりないように感じる。そのため、人の目を気にせず、自分のしたいように生活している人が多いと思った。例えば、バスに乗っていると、ドライバーと乗客が日常会話で盛り上がっている瞬間を良く見る。日本では仕事中に私語を話すことが良くないとされているが、オーストラリアでは仕事中でも人とのコミュニケーションを楽しんでいる様子がうかがえた。また、私がバスに乗り遅れそうだと感じ、走ってバス停に向かった際には、ドライバーの方が「待っているから、そんなに焦らず落ちつきなさい」と声をかけてくれた。日本はマニュアル通りや時間通りの仕事が大切にされているが、オーストラリアは何事に対しても自分自身や相手に寄り添った取り組みがされやすい国なのだと感じた。一方で、周りを気にしない性格の人が多いため、道にゴミが落ちている場面も良く見受けられる。私は夕食時にホストファミリーと日本の文化について話した事がある。ホストマザーは「日本の学校には掃除の時間があるって本当？それは凄く良い文化だと思う。」と話していた。日本人は”物を借りたときは、使う前よりも綺麗にして帰す”という感覚や”人にされて嫌なことは自分もしない”というような感覚がある。これは、些細な心がけではあるが、日本人全体が知っている常識のため日本は綺麗で清潔な国でいられるのだろうと考えた。

二つ目は学校教育だ。私はワークエクスペリエンスで私立男子校の幼稚園から小学生クラスの日本語の授業を担当した。授業の中で特に日本との違いを感じた部分は児童の授業に対する態度だ。オーストラリアの児童は挙手や大きな反応をするなど、授業に意欲的に参加する。私はその姿に衝撃を受けた。日本の児童と何が違うのかを分析した結果、2 つのポイントがある事に気が付いた。一つ目は上記で述べたオーストラリア人の人柄だ。人と比べず、自分の得意分野で頑張るという考え方が授業での前のめりな姿勢に繋がっている。そのため答えが合っていなかったり、日本語の読み方を間違えたりしても恥ずかしがらず次の学びに活かすことが出来ている。二つ目は先生の教育の仕方だ。日本と比べてオーストラリアの先生は児童と距離が近いように感じる。例えば、昼休みは児童が遊んでいるグラウンドに当番の先生が見回りに行き、児童とコミュニケーションをとっている姿が見受けられる。また、道で先生に会ったときに挨拶は勿論、Smalltalk をすることが当たり前である。授業中でも先生がグループや時間を全て区切るのではなく、児童と「誰と・何を・どれくらいの時間行うか」など相談して決めている。そのため児童も先生とコミュニケーションをとることに苦手意識を感じる事が少ないのだろう。また、各週で目標が決められるのだが、その目標が risktaker や challenge というような挑戦する事に重きを置いた目標が選ばれる。そのため、児童は正解する事よりも挑戦する事が重要だと分かっている。これは、日本にも取り入れるべき教育方針だと強く感じた。日本での学びとは、受験に合格するための勉強という

イメージが強くある。そのため、回答が正解であることが重要視されやすく、答えがあっている保証がないと発表できないという消極的な授業環境が非常に多い。今日ではプレゼン力や社交性が重要視される世の中へと変わっている一方で、自分の意見を表現できなかったりどこまでも正解を追求してしまったりする行動は変えていく必要があると強く感じた。私は中期留学を通して、オーストラリアと日本の性格の違いと学校教育の違いについて深く考えることができた。また、多くのバックグラウンドを持った人々や国籍の違う人々と関わる中で自分の中に新たな価値観や視点が増え、自分の将来や個性についてより明確に考える事が出来るようになった。日本の文化に疑問を持つ人や日本を窮屈だと思っている人は一度海外に行って、自国と自分を見つめ直す機会を作る事も今後の人生をより良く過ごすために鍵になると感じた。